半導体漫遊記 ㊼

湯之上隆

創造とは統合すること
模倣は技術革新に必須

「あなたは創造的だ」と言われたら、ほとんどの人が喜ぶだろう。しかし、「あなたは模倣がうまい」と言われたら、多くの人が不快感を示すに違いない。私だってそうだ。

ところが、最近二冊の本を読んで、創造に対する認識を多くの人が間違えていること（私もその一人）、模倣にはマイナスのイメージがあるが決してそれは正しくないことを知った。

地球物理学者の赤祖父俊一は、著書『知的創造の技術』（日経プレミアシリーズ）で、創造とは無から有が生じることではなく、「二つ以上の事実を統合すること」であり、統合する事実が特に相互にまったく関係が無いと思われているものであるほど創造性が高いと述べている。

例えば、ニュートンは木から落ちるリンゴと、太陽の周りを回る惑星運動を結び付けることによって、万有引力の法則を導き出した。今はトキスティーブ・ジョブズは、音楽と携帯電話とコンピューターを統合してiPhoneを創り出した。つまり、創造とは統合なのである。

一方、オハイオ州立大学フィッシャー・カレッジ教授のオーデット・シェンカーは、「模倣とは複雑で希少な能力であり、イノベーションを生み出す必須要素である」という出だしで著書『コピーキャット』の記述を始める。最初は頭の中が疑問符（？）だらけになったが、読み進めるうちに目から鱗が落ちた。

知識も技術も模倣により伝達される。伝達される際に改良が加わり、それが歴史的な時間の中で蓄積され発展していく。つまり、模倣は人間が進化し、文明が発達するうえで極めて重要な役割を果たしているのである。

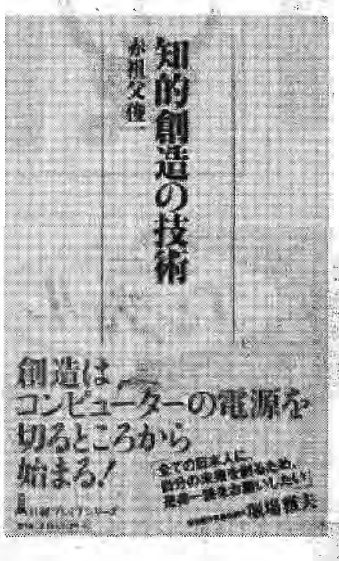
例えば、学校の勉強のほとんどが模倣だ。模倣によって読み書きを覚え、計算手法を学ぶ。考え方ですら模倣することによって身に付ける。高校・大学入試などは、模倣能力をテストしていると言っても過言ではない。

そもそも日本人は模倣に優れている民族である。日本は遣隋使・遣唐使の時代から、自国に適合するように工夫を加えながら近隣諸国から多様なアイデアを模倣してきた。明治維新の際には、欧米のアイデアやモデルを広範囲に模倣し、可能な限り自国の状況に合わせた形に最適化して導入した。第二次大戦後は、米国をお手本に、クルマ、家電、半導体産業を創造的に模倣し、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われるまでになった。

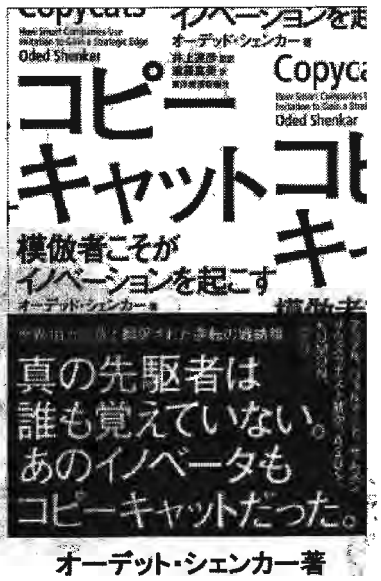
ところが頂点に到達した瞬間に日本人は、「キャッチアップは終わった、これからは日本人が創造する時代になった」と認識した。しかし前述の通り、この「創造」の認識が間違っていた。その結果、日本の電機も半導体も失速し、今日の大崩壊に至ってしまった。

日本のエレクトロニクスが競争力を回復する唯一確実な方法は、「創造」の正しい意味を理解した上で、自ら捨て去ってしまった模倣能力を、もう一度、取り戻すことではないか。

（半導体技術者・社会科学者）



赤祖父俊一著『知的創造の技術』（日経プレミアムシリーズ）



オーデット・シェンカー著『コピーキャット：模倣者こそがイノベーションを起こす』（東洋経済新報社）